

令和3年度 発達支援相談室活動報告

(令和3年4月1日～令和4年3月31日)

(1) 発達相談

令和3年4月1日以降の新規受付件数は3件であった。令和3年4月1日以前からの引き継ぎケースと合わせると、本年度の総受付件数は51件であった。以降は継続となったケースについて報告する。

表1 受付件数

受付別	件数
新規受付ケース(令和2年4月以降新規受付)	11
引き継ぎケース(令和2年4月以前に受付)	40
合計	51

年齢別にみると、乳幼児が10人、児童29人、生徒(中学生)6人、生徒(高校生)2人、高校生以上が1人、成人が1人であった。このことから学齢期を中心に幅広い年齢層の発達に関わる相談を受けていることがわかる。

表2 年齢区分別

年齢区分	人数
乳幼児(就学前)	10
児童(小学生)	29
生徒(中学生)	6
生徒(高校生)	2
高校生以上(未成年)	1
成人	1
合計	49

相談内容別の件数は表3の通りであり、「発達障害」に関するものが47件と最も多く、全体の90%以上を占めている。

表3 相談内容別

主訴(相談内容)	件数
発達相談	49
ビジョントレーニング	2
合計	51

面接形態別相談件数は親単独面接が4件、親子並行面接(時間別並行面接を含む)が44件、個人面接が1件であった。

表4 面接形態別

面接形態	件数
親単独面接	4
親子並行面接(別時間並行面接を含む)	44
個人面接	1
合計	49

月別の面接およびプレイセラピー回数は表5の通りである。今年度は対面でのプレイセラピーおよび面接を中心としつつ、状況に応じて昨年度試験的に実施されたZoom等を用いたオンライン交流や電話相談も今年度も引き続き並行して行った。対面での相談活動と遠隔での相談活動の件数を分けて表に示す。遠隔での面接は相談室の開室期間と大学の夏休み期間が重なる9月に最も多く活用されていることが分かる。

表5 月別面接回数(本年度)

月毎	回数 (対面)	回数 (遠隔)	回数 (合計)
令和3年4月	42	3	45
令和3年5月	59	6	65
令和3年6月	61	4	65
令和3年7月	76	5	81
令和3年8月	26	3	29
令和3年9月	6	22	28
令和3年10月	67	5	72
令和3年11月	83	3	86
令和3年12月	78	4	82
令和4年1月	64	2	66
令和4年2月	63	1	64
令和4年3月	74	4	78
総面接回数	699	62	761

転帰は継続が 45 件、終結が 4 件、中断となったケースは 0 件であった。

表6 転帰

区分	件数
継続	47
終結	4
中断	0
合計	51

(2) グループプレイセラピーの発達相談

発達障害の児童を対象にグループプレイセラピーを実施した。実施月と回数および参加児童数を表 7 にまとめる。1 回当たりの平均参加児童数は 2 名であり、2～3 名の範囲で変動した。今年度の実施期間は令和 3 年 5 月～令和 4 年 2 月までであった。グループプレイセラピーの実施に際し、グループ運営を飯塚一裕センター担当教員が担当した。また、協力スタッフとして学生相談スタッフ（特別支援学校教員養成課程および特別支援教育特別専攻科所属学生）8 名がプレイセラピーを担当した。

表7 グループプレイセラピー実施回数

実施月	実施回数	参加児童数
令和 3 年 4 月	0	0
令和 3 年 5 月	1	2
令和 3 年 6 月	2	5
令和 3 年 7 月	2	5
令和 3 年 8 月	0	0
令和 3 年 9 月	0	0
令和 3 年 10 月	0	0
令和 3 年 11 月	2	5
令和 3 年 12 月	2	5
令和 4 年 1 月	2	6
令和 4 年 2 月	1	3
令和 4 年 3 月	0	0

(3) 感情のコントロールに焦点を当てた指導プログラムの実施

令和 3 年度、12 月から 3 月にかけて計 5 回（1 回 2 時間）、家庭場面で不適応行動が生起している自閉スペクトラム症児に対し、

感情のコントロールに焦点を当てた SST プログラムを実施した。対象児は小 4 から中 1 の男児 4 名である。岩本佳世講師が全体計画を立案・統括し、鈴木伸子教授、飯塚一裕准教授、吉岡恒生教授が共同実施した。ビデオ撮影、指導教材作成補助、SST 実施補助として、大学院生 5 名と学部学生 6 名、特別専攻科学生 4 名が参加した。